



137号
2008/10/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



眼力をこめて見得を切る京劇俳優・張紹成さんの絢爛たる立ち姿‘わんりい’の京劇鑑賞会より by 井田 & 木村

‘わんりい’137号の主な目次

北京雑感その(28)「月餅」	2
私の調べた四字熟語(26)「小心翼翼」	3
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	3
すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮(6)	4
内モンゴル・草原の広がり(下)	6
媛媛讲故事(7)「炎帝・神農氏」	8
「小河淌水」の歌詞	8
四姑娘山・写真便り(12)「北極野牛・マスクオックス」	9
スリランカ紹介(22)「シーギリヤのみやげ物売り」	10
京劇と‘わんりい’	11
私の四川省一人旅(18) 亜丁V	12
李家山村で農家民宿に泊る	14
黄土高原の旅・雑感	14
四川地震義援金・現地からの報告	16
中国を読む(55)「挑発する知」	17
‘わんりい’掲示板	17・18

まちだ市民大学HATS・まちだ市民国際学
公開講座「中国の伝統芸能・京劇を知る」

2008年11月18日(火) 18:30～20:30
於：町田市民フォーラム・3Fホール
講師：張紹成(CSC企画 京劇団主宰)

●参加：無料 申込みは、11月4日以降コールセンター
で先着順で受け付けます。☎：042-724-5656

まちだ市民大学国際学、2008年度後期は「中国の今を知る・私たちの未来を考える」というテーマに基づいて、今、世界の熱い注目を浴びている中国の今日を知り、私たちとの関わりを考察するために、12回シリーズの講座が開かれます。

シリーズ9回目は、‘わんりい’の活動紹介の一端として、日本で京劇を初め、カンフーや太極拳など中国武術の紹介や指導を続けている張紹成氏にお願いし、中国の代表的な演劇「京劇」を紹介して頂くことになりました。

京劇鑑賞が更に面白くなること請け合いです。皆様、是非ご参加を！（関連記事11p）

「中国語で歌おう！会」の案内は11pに掲載しました。

今年の中秋節は、9月14日でした。

中秋の名月と言うと、9月末を連想しますが、農暦ですから毎年、随分前後します。最近では、2000年と2003年が同じように9月10日前後でしたが、2006年は10月6日、2007年は9月25日でしたから、今年は随分早く感じます。

中秋節が10月に入ってからの2006年でさえ、8月末にはちらほらと月餅の特設売り場が設けられ、乙に澄ましたホテルの入り口でも、赤い布を被せたテーブルの上に、贈答用月餅の箱を並べて売っていました。暫くすると、月餅の箱を入れた、派手な紙袋を両手に5,6個ずつ持って、あたふたと車に乗り込む営業担当者らしい人達を見かけるようになります。今年の北京は、オリンピックと月餅販売が重なって、ことのほか賑やかだったのでないかと想像しています。

中国の人々は、中秋節と月餅に特別な思い入れがあるようです。会社関係の贈答は儀礼的な意味合いが大きいようですが、一般の人々は、お世話になった先輩や、両親、親戚、先生等に心を込めて贈ります。その月餅は、綺麗な箱に麗々しく詰められ、値段もかなり立派です。贈答用月餅には、殆ど100元以上の値段が付いています。有名なホテルやレストランのものと、500元とか600元というものも少なくありません。

贈答用月餅は、外側の飾りと中身の内容と製造元のネームバリューで値段が決まります。パッケージは主な販売戦略の一つで、種々工夫が凝らされます。一度私が頂いたものは、ある有名なレストランのものでしたが、赤い厚紙のケースがあって、それを外すと金と赤でお目出度い絵を描いた木製の箱が出てきます。箱の蓋を開けると、黄色い絹の布が張ってあって、布に包まれるように、文字をデザインした模様で、凝った形の紙箱が6個並んでいました。その箱を開けると、ビニール袋に入った月餅が、プラスチックの皿状ケースに乗って出てきました。

4,5年前から、月餅の過剰包装が問題視されるようになり、政府が簡素化を呼び掛けていますが、なかなか改まりません。つまり、省エネの意識よりも購買力の伸びの方が勝っているのです。私が経験している5,6年の間でも、年々包装がエスカレートし、価格も上昇しているように見えます。

月餅のお味はとてもリッチで、皆で切り分けて頂くと、中秋節本来の「一族の団欒を楽しむ」趣もしっかりと伝わってきます。餡の中身は、小豆の餡にくるみや蓮の実を練りこんだり、胡麻や棗の餡、チョコレートの餡と

千差万別です。中には、朝鮮人参やレイシを練りこんで薬効を謳ったものもあります。

中国の方が好きなのは、卵黄の塩漬けを入れたもので、切ると餡の中に月が見えて、なかなか良いものですが、味は特別美味しいとは思えません。味の点で、私が好きなのは、「五香」とか「百果」とか言って、木の実がたくさん入っているものです。これは中国の方々も好きで、バラ売りでは真っ先に売り切れます。

北京で暮らして楽しかったのは、市場では食品の殆どが計り売りで、しかも日本と比べると驚くほど安いことでした。お饅頭や最中のような形態のお菓子に、1.2元とか、0.8元とか値札がついているので、1個がその値段かと思い、「5個ください」と言うと、計って「1.8元です」とか「3.2元です」とか言われて、驚くことが間々ありました。値段は1斤、つまり500gのものだったのです。平均所得が違う日本と比べても意味はありませんが、円に換算するとビックリするような値段で、つい嬉しくなってしまうものでした。

ところが、月餅の場合は違います。派手な包装費用は別にして、月餅自体もかなり高価です。中秋節が近くなると、お菓子屋さんやスーパーで、家庭用にバラの月餅を売り出します。その値段は、6.8元とか4.8元とか付いているので、他のお菓子と同じように、1斤の値段かと思いますが、実際は、月餅に限り1個の値段なのです。他のお菓子と比べると随分高いと思いますが、北京の人々は気にしていません。

尤も、この時期、スーパーでは、直径3センチ位の小さな月餅も売っていて、これは計り売りです。餡の種類で値段も違います。凝ったのは有りませんが、小豆餡、棗の餡、梨やパイナップル入りの餡、木の実の餡などがあり、ここでも、「百果」が一番先に売り切れます。「百果」と言っても、メーカーによって味が微妙に違うので、味見をしてから買おうと、食べ比べて美味しかったものを4,5日後に買いに行ったら、「百果」だけが売り切れとすることを何回も経験しました。

月餅は、「どんどん作ってどんどん売る」と言うものではなく、中秋節前に一定量作って出荷したら、それ以後は作らないようです。あちこちで売られていた月餅が、全部のお店で完売と言うことは考え難いのですが、私が出歩く地域では、中秋節後に月餅を買うことは出来ませんでした。本当に売り切れてしまうのか、戦略的に市場から引き上げるのか、どこか他では売っているのか、これからの研究課題です。

何事をやるにも、いつも回りを気にしてびくびくしている人を評して、「彼はもともと気が弱いとは思っていたが、これほど小心翼翼とした人物だとは思わなかったよ。」のように言ったりしますが、このように“小心翼翼”は比較的身近なところで使われていると思います。

ではここで早速辞書を調べてみましょう。

三省堂 現代国語辞典では、「小心翼翼 小さなことでも気にして、たえずびくびくしているようす。」

小学館 中日辞典では、「小心翼翼 成語 言動が慎重である、注意深い。もとは《詩経^注》の中の句で、厳粛で敬虔であるという意味だったが、現

在では注意深い、少しもおろそかにしないという意味に用いる」とあり、さらに“小心翼翼”は日本語の「小心翼翼(気が小さくてびくびくしているさま)のような悪いニュアンスはない」と、日中の違いが述べられています。

この成語の由来は《詩経・大雅・大明》の“维此文王，小心翼翼”の部分です。

宋朝の時代に賈黄中という大変学問のある人が居りました。両親は彼が小さい時から厳格に育てました。五歳から父親について書を読み、十五歳で科挙の“進士”に受かり、本を校正する役の官位に就きました。賈黄中は正直かつ清廉にその勤めを果たしました。

彼が宣州の太守に任ぜられていた間のある年、宣州は天災に遭遇し、多くの庶民が飢えで亡くなりました。賈黄中は非常に心配して、自分の家に蓄えていた食料で、何千人もの人々を救いました。さらに金陵という地で職に就いていた時は貯蔵庫内に数十箱の金銀財宝が有るのを発見しましたが自分のためには残さずに、直ちに朝廷に献上しました。宋太宗は大変喜んで、彼の清廉潔白な仕事ぶりを褒め、また母親とも引見しました。そして孟子の母親同様素晴らしい教育をしていると褒め称えました。

ところで、賈黄中には欠点が一つ有りました。それは仕事をする時に真面目で細かすぎることです。大きな仕事に向かうといつも仕事ぶりがてきぱきとせず、断固とした処理が出来ないのです。その為、大事な仕事が往々にして手遅れになってしまうのです。そういうこともあってその後太宗は賈黄中を他所の地の仕事に差し向けました。賈黄中が太宗にいとまごいをした際に、太宗は彼を戒めてこう言いました。「君子である

うと、臣下であろうと、仕事をする時は、いつも慎重で用心深くなくてはいけない、しかしそれが度を過ぎると大臣の身分も失ってしまうかもしれない。このことを肝に銘じて置きなさい」

賈黄中は役人である間ずっと清廉でありつづけたので、死んだときは家は大変貧しい状況でした。宋太宗は彼の清廉潔白を表彰する為に三十万両を与え、また孟子の母親同様と評した老母にも白銀三百両を与えたのでした。

注) 詩経：詩経は、中国最古の詩篇である。古くは単に「詩」と呼ばれ、また周代に作られたため「周詩」とも呼ばれる。儒教の基本経典・五経あるいは十三経の一。漢詩の祖型。古くから経典化されたが、内容・形式ともに文学作品(韻文)と見なす。もともと舞踊や楽曲を伴う歌謡であったと言われる。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

松本杏花さんの俳句 yú qíng cān xīn 「余情残心」より

白雲山はるか花城や秋日和

shén xiù bái yún shān
神秀白雲山

yáo yáo huā chéng bǎi huā yān
遥遥花城百花妍

qiū kōng wàn lǐ lán
秋空万里藍

季語：晴空万里，秋

赏析：天藍花紅，惟有花城！若无感動，豈不怪哉！

背負う嬰笑みに安堵の野菊かな

bēi shàng tuō zhì yīng
背上驮稚嬰

liǎn dàn ān rán xiào yíng yíng
脸蛋安然笑盈盈

làn màn yě jú qíng
烂漫野菊情

季語：野菊花，秋

赏析：俳句中的野菊花，一般指海谈滩，山野的丛生菊花，百黄斑斓，野性十足。

本首俳句借盛开的野菊花，赞赏陋乡僻壤的农家子女茁壮成长，以及知足常乐的恰然心态

すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 岩田温子 訳
第6回 名利を求めて

近年、高鳳蓮さんは、一層迫力のある、人の目を奪うような作品を発表し続けています。20枚の紅い紙で組み合わせた巨大な剪纸《黄河风情图》シリーズは彼女ならではの作品です。単純な図柄だった作品は、言葉による説明が必要な、スペクタクル的風景や叙事詩のような大きな作品に変わり、また、例えば《二十四孝》^{注1)}のような文学性が高い題材も、あまり内容を把握しないままにさかんに取り上げるようになってきました。そのため作品は典型的になり、図解式の画面が度々あらわれるようになりました。

一連の作品の中で比較的目立つ作品は《梁山伯と祝英台》^{注2)}です。これは全紙大の2枚の紅い紙を使った作品で、目が眩むほど華やかなものですが、主と従の区別が無く、人物は重複しています。しかし、高鳳蓮さん本人の説明を聞けば、かえって面白みが感じられ、完全に黄土高原版《梁祝》といえます。

このほかにいくつかの大型の剪纸作品、例えば《陕北风情图》、《黄河人家》などは画面が煩雑で、人物は類型化し、意余って力足らずの感じがあります。作品はすでに完全に窓花（窓の装飾として剪られた剪纸）の範疇か

ら脱却し、作品に込められた情報も多くなり、画面を理解するには言葉による説明に頼らざるを得なくなってきました。

こうなると文字を知らない高鳳蓮さんにとって、これらの作品の制作はかなり苦勞の多いものだったろうと想像できますし、彼女自身も“この仕事は本当に頭が痛かった”と認めています。高鳳蓮さんは剪纸への激しい情熱と制作にあたってのインスピレーションがすでに弱まってきていて、言葉でどのように説明ができるかということに専念するようになってしまいました。その上、民間芸術の剪纸分野でのリーダー的地位を固めることに腐心し、剪纸への情熱を計る天秤は栄誉と名声、さらに経済的な利益を求め方へと傾き始めたのです。

実は、剪纸芸術は山の上に咲く花が季節が来れば咲きそしてしぼむようなもので、人が自らの興味に従って剪り、自らが楽しむものです。雨が十分に降り、太陽の光を充分浴びれば、花は美しく咲きます。しかし、雨が多すぎ、激しい陽光にさらされれば、萎み、散ってしまいます。民間の間で剪られてきた剪纸も同じことなのです。

2001年から2003年の2年間、私は延川県文化局で働



梁山伯と祝英台 近期

きました。1～2ヵ月に一度は高鳳蓮さんを訪ねましたが、剪紙については触れず、ただ、農作物の出来具合や、家庭のこと、子供たちのこと、仕事のことなどを話しました。

そのときの高鳳蓮さんと私の対話はこんな具合でした。「あなたはここ数年、ずっとこの山の中を駆け回っているけれど、家のことはほったらかしているのかね？」

「いや、妻も私も、もうお互いに歳をとってるもの。妻も娘も私がいけないには慣れっこになっているし、娘は小さいときから父親は家にいないもんだと分かっているみたいでね」。

「娘が一人だけなんて本当に侘しいもんだ。奥さんを連れてきて、ここで子供を生みなさい。私が育ててやるよ」。

「ああ、それは好いねえ」。

またある時、高鳳蓮さんはとても真剣に私に向かって訊いてきました。

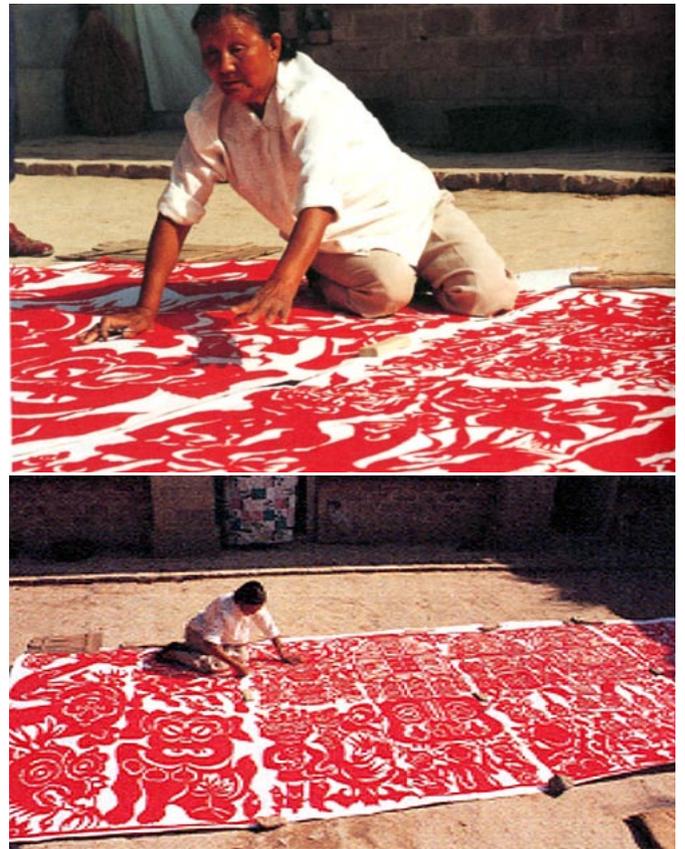
「あなた達のような人は世の中のことをよく知っているだろうけど、中央テレビ局が毎日私を放映しているね。お金を請求できると思うかい？」

これは誰かが高鳳蓮さんをそそのかしたに違いありません。彼女が言うのは、毎日午前8時半に中央テレビ局が放映する“紅い夕陽”という番組のタイトルの中で彼女が剪紙を作るシーンを指しています。

私は「番組制作のことは良く知らないし、高鳳蓮さんはもう剪紙の名人で、誰にでも知られた公の人なことから、お金は要求しないほうがいいでしょう」と答えました。しかし、こんな通り一遍の言い方ではもう彼女を満足させることはできませんでした。

2003年5月、私は延川県での2年に渡る仕事が間もなく終わるといふときに、高鳳蓮さんに別れを告げに訪ねました。

丘の小道を手を取り合って歩いているときに、私たちは同時にお互いに長い間気にかけていたことを話し出しました。即ち、高鳳蓮さんは私が住んでいる都市で一度



大作に挑む高鳳蓮さん

展覧会を開きたいと考えていること、そして、私も必ず早いうちにその展覧会を実現させる努力をすると答えました。

■訳注

- 1) 二十四孝：中国において後世の模範として、孝行が特に優れた人物の故事を集めたもの。「孝」は儒教の倫理思想の核心として長い間、中国社会で家庭関係を維持するための道德基準であった。
- 2) 梁山伯と祝英台：中国東晋時代の悲恋の物語。中国版のロメオとジュリエットともいわれる。



六駿図 90年代後期

●山荘生活つづき

ブルグッドさんの山荘は、他の日本人グループや、馬頭琴関係者がしばしば利用するようだ。そういった客への食事の用意や、期間外の山荘管理は隣家のBさんの家族がする取り決めになっているらしい。B家の料理はだんだん上手になったのか、最初から上手なのかは不明だが、辺境にしてはおいしい。朝昼晩、食事ごとにうきうきとB家に通う。おとなりB家までは歩いて200mくらいである。

食事の内容は、日本人の口に合うよう、モンゴル料理よりは、漢民族の料理を主に出してはいまいか？。一度登場した水餃子は大きさが不揃いだったので、B家の漢民族料理は逗留客向けのにわか勉強かなと思った。彼らの料理にすこし、瑕疵があつてなぜかほっとした。

日々3食付きなので、ねじが緩みきつた生活が堪能できる。テレビ、新聞、お土産屋、電話など外部からの刺激がないので自己希望による島流し状態だ。まあ、たまにはそれも悪くない。食事と食事の間は、それぞれ好きなことをする。歯を磨いたり、ハンカチや靴下を洗ったり、友人とのおしゃべりなどなどで、退屈するでもなく何となく時間が流れる。

ネオン街がないせいか夜寝るのは早く、速い。ひとつには気温が低いこともある。夕食やアルコールで温めた体が、冷めぬうちに、寝具にもぐり込むのである。山荘の位置は、北海道北部の緯度だし、1000mを超す標高なので、陽が落ちると身震いするほど寒い。暖房は各部屋にかつて公共の建物などで見かけたスチームパイプの暖房と、ひと部屋のみにあるオンドルだ。そして、熱源は乾燥した「牛糞」で、これをかまどでジワジワ燃やす。牛糞が燃えるさまは特大のお灸のようで、なんだか頼りない火だなーと思ったが、結構やんわりと暖まり、優れものだ。

私とAさんが使った部屋は鋼鉄製の2段ベッド6人部屋で、機能本位だから軍隊仕様かと思ったが、学校の寄宿舎で使っていたベッドとのこと。自室をいここカップルに譲ったブルグッドさんと、もう一人の好モンゴル人1名と同室で都合4人で使用。私たちが寝るとき彼らはまだ食堂で小宴会中。私が朝目覚めると彼らはちゃんとベッドに収まって可愛らしく熟睡中なので、まるで早番遅番の2交代、2



シリン浩特駅。駅前の広場はさっぱりと何も無い。



楽しい車内生活。カボチャのタネ食べ方伝授中。

部制の寢室だった。

●列車で北京へ

山荘生活はこの辺で切り上げ、旅のもう一つの目的、「列車の旅」に移ろう。

6月6日、前夜泊まった、西ウヅムチンのホテルからバスで北京へ繋がる盲腸線の起点、錫林浩特(シリン浩特)市へ行った。ここからひとまず内モンゴルの省都、呼和浩特(フフホト)までローカル線に乗る。列車名は「N285/N288次快速列車」。錫林浩特駅出発10:37、終着呼和浩特駅到着21:30、走行661キロ9時間57分の列車の旅だ。

シリン浩特駅は市街地から伸びる幹線道路の突き当たりであり、形状は低い箱形の左右対称、白い、長い建物だ。駅近くは石畳の広場と、殺風景な空き地、広い道路などで仕切られた味気ない空間となっている。従って乗車までの暇つぶしにお店を見て歩く旅の楽しみはない。売店が駅構内にあるのみで、カップ麺、飲み物、スナックなどが買える。乗客の荷物は空港にあるようなベルトコンベア式の検査機で、安全確認チェックを受ける。検査機には専従の係員が張り付いていてなかなか物々しい。

待合室をのぞくと、乗客は荷物を身近に置いて、赤いプラスチックの椅子におさまっている。待合室はかなり広く、日本の幹線駅の待合室より広くゆとりがある。

やがて改札が始まり、ホームに出るとこれがまた広い。駅舎から線路までサッカー場の短辺ぐらいいはありそうだ。ホームのかなたに停止中の列車は長い、ナガイ編成で、動く万里の長城は大げさだが…。

中国は社会主義国なので、1等とか2等などという不平等な表現は無く、状態を記述することで逃がれている。硬い寝台の「硬臥」、柔らかい寝台の「軟臥」といった具合だ。実際は、階級差別だが*。「グリーン車」のような曖昧な表現は無い。日本ではメニューでも、上等、中等、下等はダメ、「松・竹・梅」など言い換える。

ブルグッドさんに導かれて収まったところは、3段ベッドのコンパートメント。この列車は昼間走るのでもベッドは使わず、3人掛けの向かい合わせで、6人席。クラスとしては



広すぎるシリンホト駅のホームとフフホト行きの列車

下級寝台の「硬臥」。

いつしか定刻となり、列車は滑り出した。いかにも頑丈そうなディーゼル機関車の牽引で、適度な振動が心地よい。乗車前に仕入れた、酒類、つまみ類を広げる。一行は12人なので、コンパーメント2つで丁度良い。差し入れたり、差し入れられたりで席の移動がしばしば。

窓の景色は草原と、土色の村落が時折流れ去るだけで変化に乏しい。といて退屈かというところでもなく、列車の旅を愉しんだ。給湯設備の場所を捜したり、洗面所やトイレのチェックも車内居住性向上には必要だ。トイレは、昔の国鉄と同じで、「垂れ流し」であった。従って停車中は使用禁止となる。だから、「風水」の理由で窓を開けるのはためらう。テレビ番組「関口知宏の中国列車の旅」で関口氏はいつも、進行方向に背を向ける側に座っていたように記憶するが、理由は「命中」を避けるためだったのではないかとはいえ、トイレのことは中国では普通のこと。それより、列車での禁煙が行き届いているのは上出来の進歩だ。

昼食は、駅弁を購入する予定であった。購入駅の停車時間にブルグッドさんが仕入れに行ったのだが、弁当はなく、代わりにカップ麺を抱えてきた。弁当が無かった理由は、「悪徳弁当屋が賞味期限を過ぎた商品を持って中毒騒ぎがあり、当局がすべての弁当を販売禁止にしまった」そうだ。悪弁が良弁を駆逐するということだ、残念。

昼時になると、好みのカップ麺にお湯を注ぎ、おなかを満たす。麺だけでなくバナナ、鶏肉の薫製などを食べるのでゴミが座席の下にたまった。中国の列車では長時間乗りづめが普通なので、食事は車中になる。そのため、ゴミがたまったら掃除のおばさんが現れ、片づけてくれるのでありがたい。

とうとう暗くなり、終着駅のフフホトに着いた。さすが、省都で、9時を過ぎても駅の周りにはにぎやかだ。車にてホテルの「内蒙古飯店」へ行きここで一泊。

●幻の「高級軟臥」

翌7日はフフホト発21：23の北京行きの夜行列車に乗った。「K90次空調快速列車」、北京まで659キロである。全員、最上級の2人用コンパーメント「高級軟臥(462元)」に乗るのを楽しみにしていた。しかし、ブルグッドさんは駅へ行ってみるまで席が確保できたかどうか分からない、という。

なぜかという、「高級軟臥」はわずか1両、16人分しかなく、一応予約は入れてあるけれど、党・役人の幹部が利用すると予告無しにキャンセルされてしまうとか。駅へ着くと案の定、複数の幹部が北京出張となり、「高級軟臥」割り当ては4人分のみという。皆がっかりしたが、旅を企画したブルグッドさんの心中を思うとお気の毒だ。自分の手の届かないところの不幸だから。

4人は誰にと協議したが、年長者に割り当てるのがよいと、知恵者のS女。この案に従い、STご夫婦で一部屋、T女、O氏でもう一部屋となった。他人同士のT女、O氏はそれぞれ一夜妻、一夜夫と自分たちで言うのでおかしかった。

私を含めた残りの8人は、4人部屋の「軟臥(254元)」に乗ることになった。

乗車時間となって長いホームを歩いて列車まで行くと、各車両には一人ずつ「小姐(女性客車掛)」が入り口で白手袋をはめ、「一切只您満…」と染め抜いた赤いタスキを掛けて直立歓迎姿勢。私たちの車両にも愛嬌のある「小姐」が出迎えた。この小姐は終着まで車両隅にある小部屋に居て、深夜は眠気と戦って通路の腰掛けに座り、窓枠に手を置いて伏せっていたりした。むろん彼女は寝てばかりいるのではなく、何かと気配りをして、コンパーメントを点検したり、途中下車の客を起こしたりしていた。彼女とは別に、全車両を「回診」して歩く、制服の違う上級(らしい)の女性車掌も見受けた。両者の間には挨拶、言葉掛けなどのやり取りはなく、中国鉄道の職制を知りたく思った。

4人部屋のコンパーメントはそれなりに快適で、ドアも閉まるし、照明も暗くなる。いつしか寝ってしまった。

空が白んできて、外を見る。列車は畑の続く台地状の平原を進み、次には台地を割った、峡谷に入った。谷の両側は、石灰岩質の切り立った崖で、線路は地形の弱点を求めて蛇行する。すばらしい景観だが、谷底の流水は、ダムにとられて貧弱だし、水面が泡立っているのはいただけない。やがて溪谷を下りきると、都会の中に分け入り、北京西駅に着いてしまった。到着ホームに観光バスが乗り付けてあるのにビックリしたが、なかなか良い考えである。だが、この方式は日本では真似ができない。なぜなら、日本の駅では線路が行き止まりのフォーク形になっていないから。

こうして無事にオリンピック前の北京へ着いた。ブルグッドさんありがとう。(終)

列車番号、料金などはネットで独自に調べたので実際と違うかもしれません

*)星野博美／著「愚か者、中国をゆく」光文社新書からヒント。



K90次空調快速列車「高級軟臥」用カード式ドアロックキー

「我々は炎黄の子孫だ」。中国人からこのような言葉をよく聞きます。「黄」は軒轅氏の黄帝ですが、「炎」は炎帝の神農氏を指します。

伝説によると、大昔黄河中流の流域に遊牧の生活をしている姜という部落がありました。神農氏はその部落を治めていましたが、頭は牛、体は人間だった言われています。その頃の人々は狩猟や漁労に携わる一方、野生の果実などを採取して食べ物を得、飢えと寒さに耐えながら原始的な遊牧生活をしていました。人々が苦しむ姿を見て神農氏は、いつでも食べ続けられるようなものを探そうと考えました。

神農氏は旅に出ました。高山を登ったり広い川を越えたり、様々な苦労を重ね、中毒の危険も冒しながら数え切れないほど多数の果実を味わって、とうとう旅の目的に適う理想の植物を得ました。

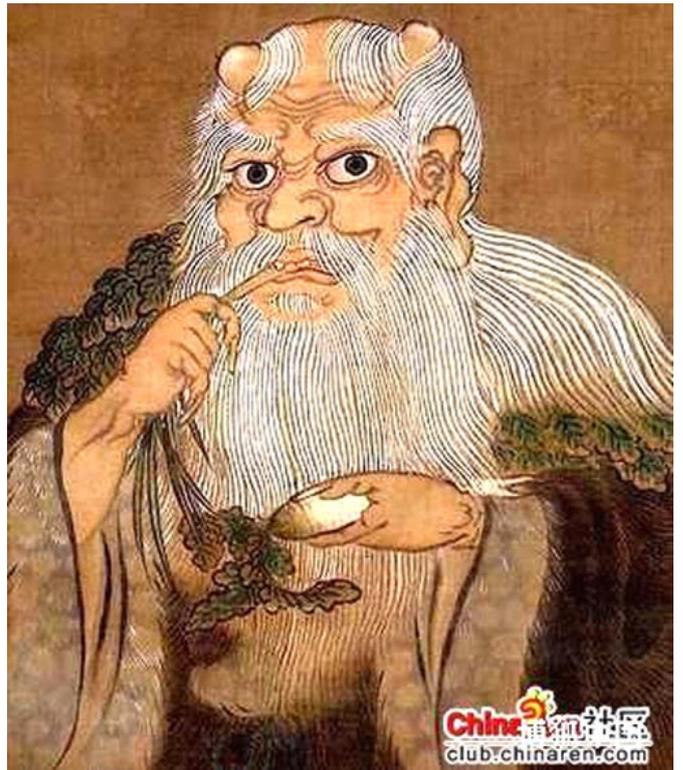
それが穀物の苗です。神農氏は人々にその苗を植えることを教え、その年から沢山の美味しい食糧を収穫するようになり、農作物の作り方は広がってゆきました。

神農氏は、また医薬の神とも言われています。大昔の人々は病気になることも多く、治療の方法も知られていなかったのです。神農氏は人々の病を治すため、山や川を越えて広い地域を踏破し、死の危険も冒して、様々な草を舐め、薬草の効用を識別し記録しました。神農氏は薬草を発見し、利用した初めての人とも言えるのです。

又、お茶の発見も神農氏といわれています。神農氏が薬草を捜し求めて方々を旅していたある時、小さなみずみずしい緑の木の葉が神農氏の目を惹きました。彼はその一枚を摘んで口に入れて、ゆっくり味わってみますと香り良く、しかもお腹の中が洗われたようにすっきりし、心身とも爽快になってきました。以来、お茶の利用が始まったそうです。

以上のことばかりではなく、神農氏は火を上手に利用して、食べ物を如何に美味しく食べるかを教え、楽器を作って大自然を賛美したり、品物を交換する方法で生活を豊かにする方法などを発明しました。

神農氏は、農業、工業、商業、医学、文学、音楽など各分野で発見や創造を続け、人々の生活を豊かにした偉大な神様として、炎帝と呼ばれならわされるようになり、今でも人々の厚い信仰の対象となっています。



xiǎohé tāng shuǐ
小河淌水

雲南民歌

yuèliang chūlǎiliàng wāng wāng liàng wāng wāng
月亮出来亮汪汪 亮汪汪
xiǎngqǐ wǒ de ā gē zài shēnshān
想起我的阿哥在深山
gē xiàng yuèliang tiānshàng zǒu tiānshàng zǒu
哥象月亮天上走 天上走
gē ā gē ā gē ā
哥啊 哥啊 哥啊
shānxià xiǎohé tāng shuǐ qīng yōuyōu
山下小河淌水 清悠悠

yuèliang chūlǎizhào bàn pō zhào bàn pō
月亮出来照半坡 照半坡
wàngjiàn yuèliangxiǎngqǐ wǒ de gē
望见月亮想起我的哥
yīzhèn qīngfēngchuī shàng pō chuī shàng pō
一阵清风吹上坡 吹上坡
gē ā gē ā gē ā
哥啊 哥啊 哥啊
nǐ kě tīngjiàn ā mèi jiào ā gē
你可听见阿妹叫阿

月が出たよ 明るい月が
私のいい人 山奥で
空の月のように歩いているのかしら？
山のふもとに小河は流れる

月が出たよ 山の端照らす
月を見ていい人思い出す
涼風が山の端を吹き渡る
ねえ あたしの声が届いたかしら

20年近く前の春5月、北極海の北緯70度に位置するビクトリア島(カナダの北西州)へ北極野牛(マスクオックス)を撮りに行きました。当時は成田からバンクーバーへの航空便が有り、私はバンクーバーで小型のローカル機に乗り換えて小さな空港が有るビクトリア島のケンブリッジベイに降り立ちました。

そこは未だ一面雪に覆われたひっそりした集落でした。私は出迎えてくれたイヌイットのガイドと一緒に直ぐに装備や食料を調達して廻りましたが、道路脇の彼方此方に凍りついた北極野牛の頭が転がっているのを見掛けて驚きました。

ここではイヌイットが北極野牛を食用にするために時々ハンティングしているからでした。(当時イヌイットには白熊ハンティングの権利も割り当てられていて、その権利をお金持ちが買ってスポーツハンティングする事も有りました。)

そんな事から北極野牛は用心深くて直ぐ逃げます。特に春は新しく生まれた仔牛が居るのでなおさらです。それに辺り一面見渡せる雪原で、大きなカメラも担いでいるため、隠れて近づく事も出来ません。そこでイヌイットのガイドは、スノーモービルで橇を引きながら北極野牛を追い回し、疲れた所で近づく作戦を取りました。橇には機関砲のように三脚にセットした大口径の望遠レンズ付き6×7版カメラと私が乗りました(北極野牛にして見ればさぞかし怖かったらろうと思います)。

イヌイットのガイドと私は殆ど白夜の40km×60km四方の雪原を走り廻りました。そして適当な北極野牛の群れを見つける度に、心苦しく思いながらも'傷付けないから我慢してくれ'と言い訳しながら雪原の暴走族になって北極野牛を追い掛け撮影しました。

3日目の午後、春に新しく生まれた仔牛が何頭も居る大きな群れを追い掛けながら撮影した時でした。仔牛は直ぐに走れなくなって雪原に立ち尽くし、心臓マヒでも起こしそうにゼイゼイ呼吸しながら、親と見まがう程の強面で我々を睨み付けました。

親を怒らせないように、そんな仔牛には近づかず更に親を追ってスノーモービルを走らせた時、橇が吹き溜まりに



北極海を渡って来た強い風が高低差の少ない島を吹き抜ける。
この風が雪を吹き飛ばすので、少し掘り起こすだけで短い夏に育った草が顔を出す。
この草を求めて北極野牛は凍結した平原を放浪する。



なった雪の斜面を曲がり切れずにひっくり返ってしまいました。そして私はカメラと一緒に雪の中へ放り出され、雪の中で息が出来ずにもがきながらやっとの思いで這い出しました。幸い大した怪我は無く軽い打撲と擦り傷程度でした。しかし大口径の望遠レンズが割れていました! 天罰靦面? でした(;_;)。

●すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html>

●大川さんのホームページはこちら
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>
<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvally.htm>

今回の主役はスリランカを代表する観光地として有名なシーギリヤで出会った土産物売りです。シーギリヤはスリランカの北部にある「文化の三角地帯」と呼ばれる地域の中にあり、コロンボからは北へ約165kmのところにあります。

アヌラダプーラ、ポロンナルワ、キャンディの3都市を結ぶ「文化の三角地帯」には世界的に有名な仏教遺跡群があります。日本ではあまり知られていませんが、3都市ともに世界遺産に登録されていて、スリランカを訪問する観光客のほとんどが此処を訪れる事を目的としています。

アヌラダプーラには紀元前5世紀にスリランカ最古のシンハラ王朝の都が置かれました。その後、インドからの侵攻によって王朝はこの地域内を南へ北へと遷都を繰り返し、仏教施設も遷都の度に造営されました。最終的には、1815年にイギリスによって最後のシンハラ王朝がキャンディで滅ぼされてしまうのですが、この地域を旅すると約2300年にわたるシンハラ王朝の栄枯盛衰を感じる事ができます。

シーギリヤも遷都を繰り返す中で、5世紀後半に11年間だけ都が置かれた遺跡です。高さ約180mのシーギリヤロックと呼ばれる切り立った岩山の頂上に王宮が造られ、岩山への登山口にはライオンの姿をした城門があったと伝えられています。現在でも巨大なライオンの左右の爪が残されています。この爪は僕の背丈ぐらいの大きさなので城門全体の大きさは、どれほどだったのでしょうか。僅か11年で遷都された後は仏教修行の場になりましたが、やがて忘れ去られジャングルに飲み込まれてしまいました。再びシーギリヤが発見されたのはイギリス植民地時代の1875年でした。

現在ではシーギリヤロックを中心に歴史公園として整備されています。僕が土産物売りとは出会ったのは公園内の駐車場でした。

この日は日本から遊びに来た友人夫妻と海外赴任はスリランカが初めてという友人を案内してシーギリヤを訪れました。思えば、僕以外はカメラとガイドブックを手に、暑苦しい服装なので、どこから見ても観光客の風情です。土産物売り達からは、さぞかし上等なカモに見えた事でしょう。車が駐車場への進入路に入った時から目を付けられていたようです。車を停めて扉を開けるや否や、各国の観光地なら何処でも同じ様に、大勢の土産物売りに取り囲まれました。

前述した様に「文化の三角地帯」はスリランカの北部にあります。有名な観光地ではありますが、政府軍とLTTE(反政府ゲリラ組織)との戦闘地域にも隣接しているために、この地を訪れる観光客も激減しています。そのために土産物売りも生活の為に必死なのでしょう。それぞれが手に土産物を持って、何とか売りつけようと袖を引っ張ったり、前に立って通せんぼをしたりして僕達に迫ってきます。これを無視し、土産物売り達を掻き分ける様にしてシーギリヤロックへと向かいました。

土産物売り達もだんだんと諦めて、次のカモを待とうと駐車場に戻って行きます。最後まで諦めずに追ってきたのは30代前半の男性一人だけで、彼が今回の主役です。彼のお薦めは木板彫刻で、特に横30cm・縦20cm位の木板に象の彫刻が彫られた物を買りたいようです。でも、お薦めの物にしては雑な彫刻で彼の子供が彫ったのではないかと思われるほどで、いかにも怪しそうな土産物売りです。

彼を麓に残して僕達は岩山を登り始めました。ライオンの両爪の間を通ると直ぐに岩肌に彫られた急な階段になります。階段を過ぎると今度は鉄製チェーンが張られただけの急斜面を、両手両足を駆使して登ります。中腹まで辿り着くとシーギリヤレディーと呼ばれる壁画があります。5世紀後半に描かれた当時には500体の半裸の女性像があったと伝えられています。現在では20体ほどの鮮やかな色彩を保持した美女達が僕達に微笑んでくれます。漸く頂上に辿り着くと1.6ha程の場所に王宮や兵舎・住居の跡、ダンスステージが残されています。王宮等の跡地も素晴らしいのですが、頂上から見る事のできる景色は正に絶景です。周りには視界を遮るものは何もありません、5世紀後半の王様が見た景色とほぼ同じ景色を見る事ができます。

岩山を降りてからは別ルートを通って駐車場に戻ろうとしたところ、先ほどのみやげ物売りが先回りして笑顔で僕達を待っていました。この人懐っこい笑顔が彼の最大の武器なのでしょう。彼はターゲットを友人夫妻に絞った様です。僕がもう一人の友人と話をしている隙を狙って、笑顔を浮かべながら友人夫妻に何か話し掛けてしまいました。注意する間もなく友人夫妻が思わず目を合わせて話に乗ってしまいました。こうなれば彼の思う壺でしょう。

お土産売りとの交渉の様子は次回に書く事にします。

❖京劇と‘わんりい’❖

まちだ市民大学・国際学

「中国の伝統芸能・京劇を知る」公開講座に寄せて

皆さんの中には、中国旅行の折などに京劇の舞台をご覧になった方も多いかもかもしれませんね。

金糸銀糸で刺繍の、絢爛豪華な衣装を纏い大立ち回りをする武将たち、あでやかな女優さんたちのしなやかで優雅な立ち居と振る舞い、入れ替わり立ち代り舞台上に現れる派手な隈取の俳優さんたち、舞台狭しとトンボを切る俳優さんたち。そして、耳を聳する金属的な舞台音楽をいやでも耳にしながらか舞台上の大立ち回りを見ているうちに、見る側の私たちはどんどん興奮の度合いを増し、気がつけばやんやの喝采を送っています。

しかし、舞台上は至ってシンプルで歌舞伎のような凝った道具立てはありません。馬が出たり、船に乗ったりなど様々な舞台設定があるのですがそれらが舞台に出ることはないのです。高い山も立派な城壁も歌舞伎を見慣れた目にはちゃちゃっぽく、時にはテーブルと椅子だけが舞台上にあるだけということもしばしばです。

話しが飛びますが、‘わんりい’が、「つるかわ中国文化研究サークル」の名称で中国語講座を始めた時の先生は、まだ20代だった京劇俳優・張紹成さんでした。

中国は、文化大革命により中国の古い伝統的な演劇である「京劇」も大打撃を受けました。「京劇」再生の為に中国国立戯曲学院が建設され、中国中から厳しく審査をし、京劇俳優としての素質と適応性を見込まれた子どもたちが集められ、将来の京劇俳優のスターを約束する教育が始められました。張紹成さんは、その中国国立戯曲学院の一期生であり、正に京劇俳優のエリートとなるべき道を歩んで成長してきた人でした。

中国から京劇団が来日することは滅多になかった90年代の初めです。「京劇」という中国伝統演劇のことは知っていても見たことのない私たちは生の京劇を見たいと思い、来日して京劇の舞台から遠ざかっていた先生は機会があれば演じたいとの思いがあり、そんなこんなで自分たちで手作りの京劇の舞台を鶴川市民センターのホールで「第一回京劇鑑賞会」として上演することになりました。

出演者も少なく、机と椅子だけのシンプルな舞台ながら、日頃のもの静かな先生とは別人のように生き生きと舞い、演技する先生の舞台姿に私たちはすっかり心を驚つかみにされました。台詞は勿論中国語で、恐らく観客の誰も理解できなかったでしょう。けれども舞台の俳優さんたちのリアリティのある仕草や身のこなしから物語の展開が目に見えるようで、満場の客席からはため息と笑声が絶えず湧き上がりました。

とはいえ、初めて見た京劇には沢山の不思議と謎があり、疑問解決のために間を置かず京劇鑑賞の手引きのような講座を開きました。そして、京劇は、俳優に洗練されたリアリティのある演技を求め、厳しい訓練で俳優育成をする一方、象徴性のある演劇様式から京劇独特の様々な約束事があり、演ずる側見る側がそれらの約束事を共有する

ことで京劇が一層面白くなるのだと知ったのです。

舞台上に置かれたテーブルと椅子(一卓二椅子)は、ベッドになり、船になり、孫悟空が腰を下ろす岩になったりします。武将が背負う4本の旗は、その武将が引き連れる何師団もの兵士であり、舞台を一回り巡ればそれは何万里も移動したことになるのです。それを知れば、演ずる役者はたとえ一人でも、舞台上には何万もの兵士が溢れ、時には意気揚々と、時には長い行軍に打ちのめされた兵士たちの姿が見えてくるというものです。

極め付きは“馬”! 馬童が房のついた馬鞭を持って現れれば舞台上に馬が出現したことになります。なんと引き出された馬の状態は馬に乗る役者の仕草で観客に伝えられるのです。

重い鎧に身を固めた武将は、馬に乗る仕草をするだけでなく、暴れる馬、坂道を駆け下り駆け上る馬、果ては疲弊し倒れる馬になり切って演技をするのです。馬の姿はないのにあたかもそこに馬がいるかのような迫真の演技には圧倒されます。

知れば知るほど京劇の奥の深さと魅力を知った会の仲間たちが、京劇鑑賞の講座と鑑賞会を繰り返し、会としての活動の軌道が定まってゆきました。当時、日本で唯一、京劇を本格的に知る講座といわれた月1回の「京劇を楽しむ講座」では、在日の京劇の俳優さんたちが京劇の話や演技を語り、中国から来日の京劇団があれば、国家第一級の俳優さんたちを講座に招いての交流もしばしばでした。

今回、まちだ市民大学から、京劇の講座を求められ、張紹成さんがその講師を引き受けてくださることになり‘わんりい’の活動の原点に戻った感銘を受けています。

現役の俳優さんが京劇の見方を講義くださる機会は滅多にありません。まちだ市民大学の公開講座に続けて、‘わんりい’として独自に京劇鑑賞のための講座を12月に開催し、京劇という中国伝統の洗練された舞台をより深く理解する機会にして欲しいと願っています。

(田井)

(まちだ市民大学公開講座・公募の詳細については、町田市広報11月1日号掲載)

♪♪「中国語で歌おう!会」・10月の歌♪♪

xiǎohé tāngshuǐ 雲南民謡
「小河淌水」

(北京オリンピックのフィナーレで歌われた雲南の恋歌を楽しく歌ってみましょう! 歌詞 8p)

於：まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、
小田急線南口徒歩5分町田東急裏109 ファッションビル7F

10月10日(金) 19:00～20:30

zhào fèng yīng
指導：趙鳳英先生(中国人歌手)

ご参加の方は録音機をお持ち下さい

●「中国語で歌おう!会」 於：まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催(変更もあります)

19:00～20:30 会費：1,500円 *体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局へお問合せ下さい。



氷河から流れ落ちてくる完璧に清浄な水をたたえ、揺らめく水が宝石のように光り輝く美しい湖。背後にそそり立つ雪と氷を戴いた岩峰。吸い込まれそうなほど青い空。まるで天国の風景みたい・・・

しかし、そんな別世界の美しい景色の中、可愛い利発な少年と二人きりで過ごす幸せな時間は、まことに遺憾ながらそんなに長くは続かなかった。

私達が湖の畔に着いてから十数分後、後から登ってきた烏里氏が追いついてきて、天国の湖に到着したのだ。烏里氏は着くなり少年に事務的に言った。

「Kさん達は途中でリタイアして此処には登ってこないから、すぐに荷物を届けなさい」

あっという間に少年はいなくなり、この美しい場所でもうしばらく少年と遊んでから一緒に下山したかった私はちょっとガッカリした気分になると、内心少しだけ烏里氏を恨んだのだ。

ちえ!! 烏里さんたらもっと遅く登ってくれば良かったのに!

しかし烏里氏は私のそんな気分には全く気付かず、あたりの風景や野草をサッと写真に撮ると、「この上にもう一つ湖があるから行きましょう」とサッサと先にたつて湖の脇の斜面を登り始めた。下界に居るのなら何という事はないのだが、もう限界に近いくらいの思いでやっと登ってきた高度から更に斜面を登るのはものすごくキツイ。とにかくたった1メートル登るのが大変な苦労なのだ。身体が重くて重くて手足が思うように持ち上がらず、一足登るごとに呼吸が苦しい。

ああ、エベレスト登山隊の気持ちが解る～! 斜面には高山にしか咲かないという青いケシが美しい花を咲かせていた。

長い時間をかけなんとか私が斜面を登りきった時には、烏里氏は何処へ行ったのやらとっくに見えなくなっていた。振り返れば眼下には先程の湖が降り注ぐ陽の光を浴び、揺らめいて燃えるようなコバルトブルーに耀いている。真上から眺めると一層美しさが際立つようだ。さっきは少年と一緒にだったが、今は一人きりだ。誰にも気兼ねなく、心からこの風景の美しさに浸ることができた。見つめていると、涙がにじんできた。

こんなに綺麗なものがこの世にあるなんて知らなかったよ・・・

世界各地に絶景と呼ばれる美しい土地は沢山ある。日本国内に限っても沖縄のエメラルドグリーン的大海だって、白銀に輝く富士の峰だって、その他世界中にこの湖と同じくらいか、それ以上に美しい風景はいくらでもあるのだろう。

しかし、これまでに私が触れてきたそれらの殆どは、ガイドブックの写真やテレビの映像、その美しさを賞賛する

文章や人の言葉など多くの情報によりあらかじめ認知され、心の準備ができている状態でのぞむ事により、そこから受ける感動の度合いは少し薄められていたのではないだろうか。この宝石のように輝く湖の美しさは、その時の私にとって全くの予想外だった。それまでに会って来た湖の常識から想像できる範疇を遥かに超えたその美しさに、私はかつて感じたことの無い衝撃と大きな感動を受けていた。

先ほどよりも高度が上がり、向かい側の岩山の氷河は目と同じ高さに見えていた。下にいる時には見えなかったが、斜面の上に立つと宝石の湖の上には岩山から流れ落ちてくる雪解け水の受け皿となる小さな泉がもう一つあるのが見えた。湖からさらに奥へ目を向ければ私達が登ってきた登山道から湖畔を通り、更に山奥へと続いて行く道が見える。

ああ・・・あそこを歩いていけば、この奥にも綺麗な湖があるのだろうか。

自分もあの道をたどって、この土地のもっと奥深くまで入って行きたいという気持ちが込み上げてくる。

以前観た『キャラバン』という映画を思い出した。チベットに程近いヒマラヤの大自然を舞台としたその映画は、ヒマラヤの高原で暮らす民族が生活物資を得るための塩を交易する隊商を組み、何ヶ月も厳しい自然と戦いながらヒマラヤの山々を越えて旅する姿を雄大に描いたストーリーだ。

そういえば、あの映画の中にも真っ青な湖が出てきてその美しさに驚いた事を思い出した。下界の人間がおいそれとは近づけない厳しい高山の中に、自然はこんなに素晴らしい宝物を隠し持っているのだ。あの映画のようにずっとずっと何日もこの山々を越えて歩いてみたら、そこにはどんな世界があるのだろうか・・・

天国の湖から上りきった斜面を少し歩いて行くと、地面が火口跡のようにすり鉢状にくぼんでいるのが見えてきた。先ほど烏里氏が言っていたもう一つの湖に違いない。期待で胸がドキドキした。近づくにつれてじわじわとくぼみの底の方が見えてくる。

ああ・・・やはりこちらも期待にたがわぬ美しい湖だ。先程の湖より水深があるためか、水はより深い青さをたたえながらも水底の石一つ一つが完全に透けて見えている。窪地の底に在り水の流れの無い湖なので、鏡のように滑らかな水面には動きが無くシンとした印象だ。すり鉢の真上から眺めると水深や水底に落ちている石の色により、湖の色に微妙なグラデーションができてるのが何ともいえず美しい。まったくこの自然がつくりだす芸術品と比べたら、たとえ何億、何千万と値のつく貴金属だろうと装飾品だろうと、その美しさは到底及ばないだろうとしみじみ思う。

再び登るのが大変だとは思ったが、やはり水辺に降りてみたい気持ちが抑えられず、すり鉢の内側を下って湖の畔まで降りた。湖の周囲にも水の中にも大小の石がゴロゴロ落ちて居るのは、この湖の真上にそそり立つ岩山から落ちてきた物だろうか。見上げると手を伸ばせば届きそうに見える氷河が今にも滑り落ちてきそう。美しい風景に酔いながら、私は少し怖かった。

怖いくらいに透明な青い青い湖のシンとした美しさ。どこまでも深く濃く吸い込まれそうに青い空。目の前にそそり立つ険しい岩峰とその頭上から生々しい迫力で口を開ける氷河の裂け目。標高が高いためか目立った植物は見当たらず、生き物の気配が感じられなかった。在るのは岩と氷と水だけの世界だ。

あまりに非日常な美しさで迫ってくる自然の中に一人だと、その迫力に気圧されるような気がして私は少し怖くなったのだ。ゴロゴロと積み重なる石の上は歩きにくく、怖いほど青い湖の周りをヨロけながらトボトボと歩いていると、頭の中がボーっとしてきた。まるで自分が死後の世界に迷い込んでしまったような気分になってくる。

賽の川原ってこんな感じかなあ・・・

この世で自分が一人ぼっちになったような気分だ。頭上で「ゴトッ・・・」という鈍い音が響いてきた。ハッとして岩山を見上げると、続いてゴ、ゴ、ゴ、ゴ、と、地鳴りのような音が響いてくるのが聞こえた。

もしかして岩が崩れてくるの!?

もし、ここで落石などあれば、岩山の真下にいる私に逃げ場は無い。石がゴロゴロしている窪地の底で、素早く落ちてくる岩をかわして逃げるなど到底不可能だ。恐怖で身体がすくみしばらく身を硬くしていたが、あたりはシンとしたまま何も起こらなかった。

恐る恐る再び歩き始めた。岩山の直下にはひととき大きな石がゴロゴロと落ちていて、その場を通り抜ける時は緊張したが、その時の私はどこか「ここで死ぬならいいや・・・」などという気持ちになっていた。

「下界から遠く離れた、こんな美しい自然の中でなら死んでもいい・・・」

非現実的な美しさの中に一人きりでいる孤独と緊張に酔ってしまった様に頭の中が痺れてぼんやりしていた。烏里氏の事も、先程まで一緒に過ごしていた少年の事も、山の麓にいる旅行メンバーの事も忘れていた。まるで世界で自分が一人きり取り残されてしまったような気分だった。

岩の裂ける様な「ゴトッ」という音や地鳴りの様な音は、その後も何度か聞こえてきて、あれは氷河がひび割れる音なのだ気がついた。長い年月の間に堆積した雪で硬く凍りついている氷河が、夏の時期になると緩んでひび割れる音が響いているのに違いない。地鳴りの音など生まれて初めて聞いたが、お腹の底に響いてくるようなあの音は、今でも思い出すと頭の中に甦ってくる。

湖の周りをぐるりと回ってみたいと思い、ぼうっとした頭

で湖畔に沿って歩いていると、対岸から見た時にはたやすく歩けそうに見えた場所が、大きな岩に遮られ行く手が阻まれていた。

足場を探しながら苦心して何とか岩をよじ登った時である。掴んでいた岩の陰にへばり付く様に細々と生えていた草の中に一匹の毛虫がいた。

私は昆虫や爬虫類の類は何でも平気だが、芋虫と毛虫だけは最大の苦手で見ただけでも背筋が粟立つ。普段の私なら自分の手元に毛虫を見つけたりしようものなら、絶叫してその場から飛びのくところだが、なぜかこの時はビクッとしたものの暖かい気持ちが込み上げてきた。この数時間まるっきり生き物の気配が感じられない賽の川原を孤独にさまよっていた私には、大嫌いな毛虫にさえ命あるものへ愛おしさが感じられてしまったのだ。

お前、こんな場所で頑張ってるのかあ・・・

思わず毛虫に声をかけてしまったのは、後にも先にもこの時だけだ。黒い身体に首の部分がぽっちりと赤色の毛虫だった。

午後遅い時間になっていたらしく、日差しが和らぎ日が傾き始めていた。

遠くから呼び声がしたので目を上げると、それまで何処にいたのかずっと姿を消していた烏里氏が湖の対岸に立っているのが小さく見えた。「そろそろ戻りましょう」と叫んで登ってきた方向を指差している。

ああ、死後の世界を彷徨っていたのじゃなかったのか。

空想の世界から急に現実に戻され、残念なようなホッとしたような気持ちになって麓に下りる道の方向に向かうと、「天国の湖」と「賽の川原の湖」の中間に当たる場所に出て、美しい湖を同時に見下ろすことが出来た。なごり惜しくて何度も何度も足を止め振り返り振り返りしながら山を下りた。

誰が何と言おうとこの半日この場所の景色は私だけの物だった。チラッと姿を現してすぐに消えてしまった烏里氏は私の視界から完全に姿を消してしまい、この凄まじく美しい世界を私は一人きりで噛み締めていたのだから・・・これが三年前(既に四年前になってしまった)の私の垂丁の思い出である。

この日、日暮れ前ギリギリでキャンプ場に戻った時には、辺りは既に暗くなりかけていた。幻の湖を見ることなく先にキャンプ場に戻っていた母達一行に、憑かれたように興奮して今日の出来事を語りながら夕食を取りおえるとすぐに眠ってしまい、翌朝朝食が済んだ時には二日前に私達を下の村から乗せてきた馬が迎えに来ていた。せわしく荷物をまとめ、くだんの少年とゆっくり別れを惜しむ間も無く馬に乗るように促されると、一行はすぐに出発してしまったのだ。

私はとことん後ろ髪を引かれる思いで垂丁を後にし、その時から垂丁は特別な場所として私の心の中に沈んでいたのだ。 (続く)

李家山村は山西省西端の、黄河の傍の小高い山の上の村です。黄河にそったバス道の村の入り口から、コーランやアワの畑、ナツメがたわわに実っている段々畑を通過して約30分、黄土の山道を高さ140m登ると、海拔800mにある村の民宿に到着です。村人の多くは、山の斜面に横穴を掘った窑洞(ヤオトン)といわれる家に、下から運びあげた石や木材で立派な門構えや塀をめぐるして住んでいます。山頂にあるだけあって、黄河の西側の陝西省の山もよく見えます。住民の殆どは李さん、だから李家山です。

李家山村にやってきた最初の晩は中秋節の前日でした。綺麗な円い月を眺めながら、気持のよい風の吹く庭で夕食をとっていると、一人、二人と村の人がやってきました。

食事をしている私たちを、おじいさんたちは黙って座って眺めています。やがて、一人のおじいさんが民謡を一曲聞かせくれました。苦しい生活の中、愛する人を残して遠くへ働きに行かなければならない悲しさを唄ったものでした。味わいあるいい声で、拍手喝采。おじいさんは気を良くしてさらに一曲。すると別なおじいさんが「自分も」と歌いだし、最後は私たちも、同宿の中国人の客たちも、日本や中国の歌を歌い、賑やかな交歓会となりました。

翌朝、村を散歩していると昨夜の村人に会いました。挨拶をすると、そのまま家の中に招かれ、部屋を見せてくれ、梨を持たせてくれました。小さいけれど、おいしい梨でした。

この李家山村の存在は、インターネットで「山西省の観光」をキーワードに検索中、「紅棗(あかなつめ)の実る村」というサイトの中で知りました。このサイトは大野のリ子さんという日本人女性が3年前から李家山とその周辺の村々に長期滞在をして、日本軍による戦争被害者を訪ね、



村から滔々と流れる黄河が見える 撮影：沖田辰夫

聞き書きをし、載せているものです。大野さんがこの地にやってきた当初は、日本人と知って、険しい表情で「帰れ!」と言う人もいましたが、彼女の真摯な姿勢と人柄から徐々に自らの体験や見聞きしたことを話してくれるようになりました。話終わると逆に「聞いてくれてありがとう」と言われたことも度々だそうです。

私はこのサイトを読んで、この地の人々の大きな心に深く感銘をうけました。言葉には言い尽くせない恨み、怒り、悲しみを心の中に抱えながらも笑顔で迎えてくれる人々の住んでいる村を訪ねたいと思うようになったのです。

山を下りる日、宿の奥さんは私に「初めの頃は日本人と聞くと嫌だったのよね。でも今は大丈夫。今度また是非来てね。」と言ってくれました。大野さんのようには出来ないにしても、笑顔で接してゆくことで日本人に対する新たな見方をしてもらえらば、是非また行きたいと思っています。

黄土高原の旅・雑感

佐藤勇治

◇山西省・李家山の水

黄河に面する小高い丘の頂に、この部落はある。丘には幾つかの亀裂が有り、深い谷を作っている。

この谷の奥には黄土と基盤の岩石層の隙間から僅かに滲み出す水が有り、この水が部落の人々の命を支えている。水は窪みに貯えられているが、我々が想像する泉とはまるでイメージが異なり貯水槽には青ミドロさえ揺れている。人々は毎朝この水を、天秤棒に下げたバケツに汲み、高低差30メートルあまりの急な崖道を登るのである。重さにして35キロほどあると言う。なんでこんな苦しい環境に住み付いたのかと勝手ながら思ってしまう。

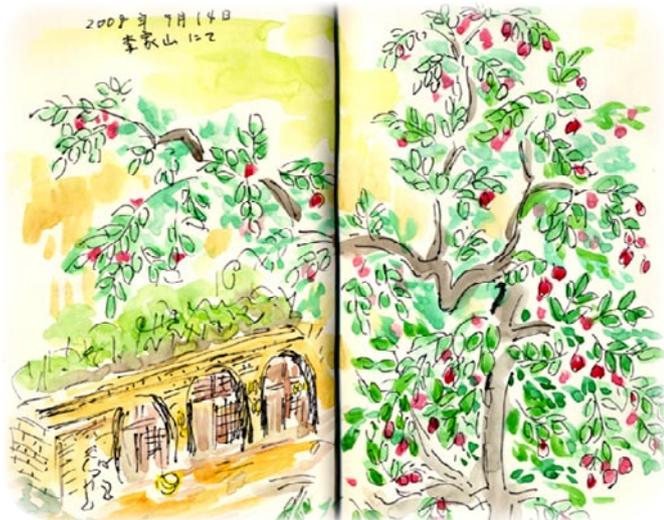
栓を捻れば瞬時にお湯まで出て来る生活と如何に異なるものか。だからここでは水は貴重である。何回か使い回しされる。風呂は如何しているのかしらというのが、我々一行の疑問であった。乾燥に向かっている地球では

何時かあのしみだす水が止まってしまうことも懸念される。そんな時が来ないことを祈っている。

◇ケイタイ

李家山の農家の姿は、私には昭和20年代の日本の農家を思い出させるものだった。その光景の中で一つ面白く感じたものがある。

それは農家のオカミサンがケイタイを使っている光景だった。アンチークと言えるような周囲とのギャップが面白かったのである。ケイタイは固定通信設備の段階を一気に飛び越して、僻地に電波通信の利点をもたらした。庭先で何処かの誰かと時を構わず会話を交わしている姿と周囲の生活設備との不一致には、アフリカのマサイ族が狩猟にケイタイを使っていることと通じる面白さがあった。



棗が実る頃。李家村にて

スケッチ：田井

庭で棗を干しながらインターネットやケイタイを駆使して、資産の運用について、投資会社とやりとりする時も近いであろうと想像した。

なつめ
◆ 棗

棗栽培が生活の手段であろうが、それにしても大変な栽培面積と本数である。11月が収穫の季節と聞いたが、一体どうやって収果するのか。多分手で木をゆすり、実を拾い集めるのであろう。オリーブや銀杏は機械化されているが、此処では無理なような気がする。家族総出、或いは季節労働者の手を借りるのであろうが、いずれにしても重労働であろう。

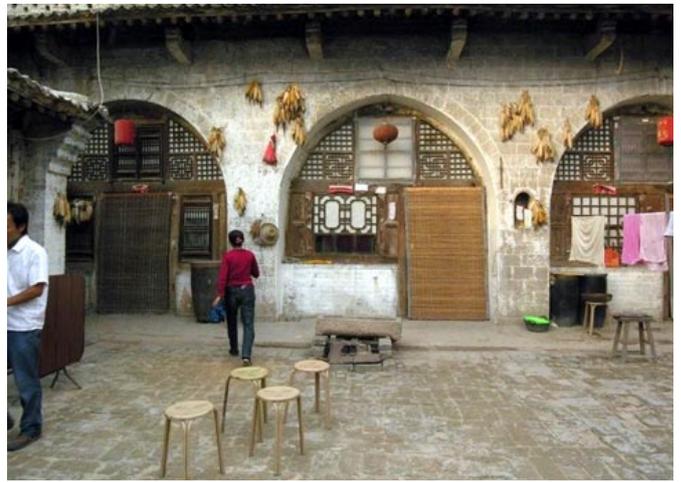
ところで棗の木に棘があるのをご存知か。山の畠に案内されて、サア自由にお採りなさいと言われ、枝に手を差し入れた途端、プツリと指に刺さり、血が噴出した。これでは動物も易々とは盗み食い出来ぬであろう。日本に渡来した平安時代には奈都女と書いたそうだが、たおやかな名前にも似ずしたたかに防御されているとは。

「見下ろせば大河流る黄土の地棗たわわに黍、粟熟るる」

◆ 石炭

山西省は石炭の産地である。それで日本では見られない光景に出会う。山西省の道路は何処へ行っても石炭トレーラーの列だ。制限重量50トンのトレーラーも20%増しまで黙認されているそうだから、60トン積みが地鳴りを上げて疾駆する。薄いアスファルト舗装など忽ち砕け散り、重いタイヤで深くえぐられた凸凹道となる。沿線は家も木々も土埃りで厚く覆われる。

通過禁止の道路を持つ町や村では禁止を無視して進入する運搬車に対抗して、橋や道路に大きなコンクリート塊を置く。我々の乗ったバスがこのトバッチリを受けて橋を渡れず、急遽、村人に集まって貰いコンクリート塊



私たち一行がお世話になった農家の屋敷。門構えも立派な四合院造りで、往時がしのばれる 撮影：沖田辰夫

を動かす破目となった。

当然の事ながら相応の出費となった。ツアーガイドや運転手には村民集めなど予想もしない仕事为上積みされる。後であれが結構村の収入になっているのではないかとこのうがった感想も飛び交った次第。石炭の生み出す富は地元には還元されて居ない様だった。

「石炭の産地を誇る黄土の地大樹茂りし太古偲ばる」

せきこう
磧口・李家山古民居（農家食宿）（李建新 & 馬栄華）
〒033210 山西省臨県磧口镇李家山村
☎ 1375388943

大野のリ子さんのホームページ / 「紅棗(なつめ)の実る村」
<http://d.hatena.ne.jp/maotouying/>

5月12日の四川地震で大被害を受けた四姑娘山の長坪村へ皆様の義援物資を送り届けましたのでご報告致します。

6月から8月にかけて、団体や個人の皆様から合計45141元の義援金が送られて来、各方面との相談の結果、義援金の内、36841元で長坪村へ電気毛布と文房具として贈りました。運送費が高騰し当初の見込みより大幅に増えましたが、全て予算範囲に収まりました。

念のための交換用電気毛布も加え、義援物資満載のトラックは8月29日22:30、成都を出発、四姑娘山・日隆には30日18:00過ぎに到着しました。途中、雨や土砂崩れに遭遇し、又運転手の交代要員がいなかったため運転手の休憩時間も必要で結局20時間を要しました。

到着後、義援物資は直ちに長坪村委員会へ引き渡し、村民の皆さんに配布されました。尚、使用してみたの結果、不良品交換の申し出はありませんでした。

長坪村の人達に成り代わり、改めて皆様の暖かいご支援に厚くお礼申し上げます。

■義援金総額：45141元

①日中文化交流市民サークル'わんりい'

- $500,000 \times 6.2293 = 31146.50$ 元
(両替日2008/08/26) 贈与先：全額長坪村

②神楽坂建築塾：

- $173000 \times 6.0979 = 10549.37$ 元
(両替日2008/08/26)
贈与先：長坪村 2749.37元、丹巴 7800.00元

③Susan M.：

- $US\$500 \times 6.8892 = 3444.60$ 元
(両替日2008/06/16) 贈与先：全額長坪村

■支出合計：45141元

- ①長坪村 小計 36841元、8月30日配布。
 - ▶電気毛布 大270枚×65 = 17550元、
小277枚×51 = 14127元
 - ▶文房具 80人分 = 2136元
 - ▶運送費 2800元
 - ▶成都の交通費(支援物資&トラック手配) = 228元
- ②丹巴 小計 7800元 = 9月18日配布
 - ▶甲居とチョンジャンの酷く壊れた民家・7軒へ
1000 = 7000元 ・丹巴の交通費 = 800元
- ③通訳&手配援助への謝礼 = 500元

注)文房具の内訳：

- ・筆箱(文具合) …………… 7.3元×80個 = 584元
- ・ノート下敷き …………… 1.4元×80枚 = 112元
- ・12色色鉛筆 …………… 4元×80組 = 320元
- ・2B鉛筆(2B鉛筆) …………… 0.23元×800本 = 184元
- ・ボールペン(336) …………… 0.35元×800本 = 280元
- ・HB鉛筆 …………… 0.22元×800本 = 176元
- ・ノート …………… 0.3元×1600冊 = 480元



長坪村委員会への義援物資引き渡し 積上げられた義援物資の前に立つ書記の沈招兵さん(中央)と村長の明亮さん(右側)。



電気毛布を贈られて喜ぶ村長夫妻



文房具を貰って嬉しそうな子供達



6年前から日本・中国・韓国は一致団結する「千載一遇のチャンス」にある、らしい。

姜尚中氏によれば、こうだ。

「韓国と中国と日本は、北朝鮮が爆発したりハードランディングしたりすることで、大幅に国益を損ないます。北朝鮮の爆発やハードランディングを何としてでも回避しつつ、金正日体制を安楽

死させることに、この三国は共通の利害をもっています。」

5年前の「中国を読む」で「(中国と日本と)韓国や台湾も含めて、EUのような東アジアでの地域共同体ができていたら無敵だっただろうに。」と過去形で文章を書いた。姜氏がどこかで発言したか書いたことを、すっかり過去形でインプットして書いてしまったのだろう。実現不可能な「if」にしか思えなかったのも無理はなく、なぜなら「千載一遇」

のチャンスはそこにあるのに日・中・韓はまだまだ遠い。

これを書いているときも、テレビからは、化学物質「メラミン」が混入した疑いがある中国製牛乳を原料に使用していた食品会社のニュースが流れている。疑いのある商品のひとつ、パンダの形をした愛らしい菓子パンは北京五輪を記念して、日本での給食の取り扱いを始めたらしい。テレビでは、「北京オリンピックにちなんで、皆に喜んでもらおうと出したのに…」とこのパンを食事に出していた施設の職員が悔しそうに語っていた。

ニュースでは自民党総裁選の映像も。そういえば最近、姜氏は政治関係のコメントを求められ、テレビで拝見することも多いが、実は投票に行ったことがない。在日2世なので選挙権がないのだ。それでも彼は日本にいて、メッセージを送り続ける。「私自身、この社会に愛着があるから。やはりこの社会で生まれ、この社会で育った。だから、この社会で生きていきたい」という姜氏は、自分が生きてきた社会に対する態度を誠実に取り続けているのだと、(勝手に)思う。

そして、もしかしたら、自分たちの社会に対する誠実な「何か」が足りないから、私たちは「千載一遇のチャンス」が生かせず、不誠実極まりない事件たちに翻弄されているのかもしれない。

真中質子

《'わんりい' 掲示板》

第11回 町田発国際ボランティア祭 2008 夢広場

🍷🍀 🍷🍀 この星に平和と希望を 🍷🍀 🍷🍀

11月2日(日) 10:00 ~ 16:00

於: まちの駅「ぼっぼ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている町田市と町田市周辺のボランティア団体が集結! エスニック料理いっぱい! 民族芸能いっぱい! そして、エスニックグッズもいっぱいのお縁日! 世界を体中で味わおう!

'わんりい'の会は、炭火でジワリと焼いた香ばしい、遊牧民風味のエスニック焼鶏を販売します。ご都合つく皆さん、是非お出掛けして焼きたてを賞味してください!!

●主催: 2008 夢広場実行委員会

●共催: (財)町田市文化・国際交流財団

問合せ: ☎042-722-4260 町田国際交流センター



【10月の定例会&おたより発送予定日】

●定例会: 10月21日(火) 13:30 ~ 田井宅

●おたより11月号の発送 10月30日(木) 13:30

◆各催しの詳細及び会場地図などは、「わんりい」HPでご覧ください。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

アフリカの子どもと私たち 参加費：無料

ー 野口英世が今の日本に問いかけること ー

講師：勝間 靖(早稲田大学大学院教授)

2008年10月18日(土) 14:00～16:00

於：町田市中央図書館 6Fホール

- ▶主催：(財)町田市文化・国際交流財団
町田国際交流センター(担当：国際理解部)
- ▶申込み：住所、氏名、参加人数を書いて葉書で申込みをし、
直接会場へ。申し込み締め切りは10月10日(金)
- ▶定員：110名
- ▶宛先：〒194-0013 町田市原町田4-9-8
町田国際交流センター・国際理解部
- ▶問合せ：☎042-722-4260 町田国際交流センター

特別展・スリランカ—輝く島の美に出会う

2008年9月17日(水)～11月30日(日)
9:00～17:00(金/20:00迄、土&日/18:00迄
(入館は、閉館の30分前まで)(月/休館、但し、祝・休
日は開館し、翌火曜日休館)

▶於：東京国立博物館 表慶館

観覧料：一般・1200円(1000円)
大学生・1000円(800円)/高校生・800円(600円)
※カッコ内は前売・団体

【記念講演会】

場所：東京国立博物館 平成館大講堂

- I) 2008年10月4日(土) 13:30～15:00
「スリランカの歴史と美術」
講師：東京国立博物館平常展調整室長 小泉恵英
- II) 2008年11月15日(土) 13:30～15:00
「スリランカの文化遺産」
講師：国際記念遺跡会議名誉委員長
ローランド・デ・シルワ氏(予定)
- 各回とも定員380名(事前申込制)
- 聴講無料。ただし、特別展「スリランカ」の観覧券が必要
です(半券でも可)。

〈申込方法〉

往復はがきの「往信用裏面」に郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・電話番号・聴講を希望する講演会の日付を、「返信用表面」に郵便番号・住所・氏名を明記の上、下記までお申してください。●1枚のはがきで、1つの講演会につき最大2名の申し込み可。2名の場合はそれぞれの氏名を必ず明記の上、ご応募ください。●応募多数の場合は、抽選の上聴講券を送ります。

〈申込先〉

〒103-0014 中央区日本橋蛸殻町1-28-9 ヤマナシビル(ウインダム内) 特別展「スリランカ」広報事務局講演会((1)10月4日または(2)11月15日)係

〈申込締切〉

10月4日講演会…先着順で申し込み受付中、
11月15日講演会…10月21日(火)必着

問合せ：03-5777-8600

和光大学 オープン・カレッジぱいでいあ
新・世界都市物語 ■ヨーロッパの都市と暮らし
連続市民講座全5回

2008年10月10日/17日/24日/31日/11月7日

各回金曜日 18:30～20:30

会場麻生市民館・第一会議室(小田急線新百合ヶ丘北口3分)

定員：50名 受講料：各回500円

申し込み方法：葉書、Fax、Eメールで「新・世界都市物語」と明記し、①氏名(フリガナ)、②郵便番号・住所 ③電話番号、④参加する回数(第○回、全5回など)を書いて送る1回のみ参加可 各回、開催日一週間前まで

申込み宛先：

〒195-8585 町田市金井町2160 和光大学・企画広報課
☎:044-988-1433 Fax:044-988-1594
E-mail:open@wako.ac.jp 詳細は同封チラシ参照を

和光大学総合文化研究所

〈2008年度公開シンポジウムと写真展〉

日本・インドネシア交流の過去・現在・未来

- 両国の国交正常化50周年記念シンポジウム
- 第1回▶日本・インドネシアにおけるエネルギー問題の歴史と現在
2008年10月18日(土) 13:00～15:30
於：和光大学 J-301教室
- 第2回▶日本・インドネシアの人的交流の現代的課題と未来
2008年10月25日(土) 11:00～15:30
〔映画上映とその解説を含む〕
於：和光大学 J-301教室
- 上映映画「マス・エンダン」
2007年夏、溺れた女子中学生を助けようとして、自らは水死したインドネシア人漁業研修生マス・エンダンを追う
- 映画解説：井上実由紀(元バンドン日本人学校教師)

●写真展示会

多様な価値観を内包するインドネシアを紹介する

「インドネシア、この10年」

インドネシア人が自国を撮影の写真展

2008年10月18日(土)～25日(土) 9:00～17:00
和光大学附属梅根記念図書館内 梅根記念室

問合せ：和光大学総合文化研究所 ☎044-989-7497

賈鵬芳来日20周年記念リサイタル・東京公演
～回帰～

中国の楽器—その音の広がり特別編として

2008年10月12日(日)(14:00開演)

会場：HAKUJU HALL

料金：6,000円 前売り 6,500円 当日(全席指定)

出演者：賈鵬芳(二胡ほか)、張林(揚琴)、ジャンティン(琵琶)、馬平(打楽器)、奥田日和(チェロ)

企画・制作・主催：ラサ企画

ご予約・お問い合わせ：ラサ企画 TEL/FAX 03-5748-3040